

百田先生をしのんで



シグマ委員会の中で、誰もが「先生」と呼んで尊敬の方がおられた。それが百田先生である。先生は、1963年にシグマ委員会が創設される時の原動力となられ、日本の核データ活動の基礎を築かれた。原研から東北大に移られ、定年退職後もお元気にご活躍とお聞きしていたが、残念ながら、去る2000年9月25日、帰らぬ人となられた。先生の思いでを5名の方にお願ひして書いていただいたので謹んで掲載します。

(編集委員会)

百田光雄先生を偲んで

(原研核データセンターOB) 五十嵐 信一

日本の核データ研究活動を組織化され、シグマ委員会を創設し、全国的な活動の基礎を築かれた百田光雄先生が昨年(2000年)9月25日に急逝された。あまりに急で思いがけないことだったので、核データセンターの中川庸雄君から連絡を受けたときには心臓が止まるほどに驚いた。核データ研究活動の先達として、また、指導者としての先生の功績は何物にも代え難いだけに、大きな損失である。

実は、7月10日付けで、「中嶋さんが逝かれ、淋しさが一入です、いつかお目にかかってお話をうかがいたいものと思っています」という手紙を頂いていた。その返事の中で、「秋になって涼しくなったら先生のお話を伺いに上がります」と約束していたので、そろそろ伺おうと思っていたところだった。約束を果たせず、申し訳なく、また、示唆に富んだ貴重なお話を伺えただであろうにと思うと、真に残念なことをしたと悔やんでい

る次第である。

私にとって先生は掛け替えのない大恩人である。原研に呼んで下さり、核データに専念させて下さったのは他ならぬ百田先生である。1963年度の原子力平和利用委託金による核データ整備研究のために設立されたシグマ委員会のワーキンググループに参加していた私を故あって原研に呼んで下さるについては、陰に陽に、種々ご面倒をお掛けした。また、原研に来てからも国内の核データの研究・整備をどのような観点から進めるべきか、すでに進んでいる国際協力にどのような貢献ができ、また援助が得られるか、など、折に触れて教えてくださった。特に、シグマ委員会の有り様はボランティアの協力無しには成り立たないことを強調され、総てをその観点から進めるようにと言われていた。1997年の核データ研究会であったかと思うが、久々に先生もご出席になられた。その懇親会で私が挨拶をすることになり、シグマ委員会の活動が35周年を迎えることになったのも原研内外の多くの方々の協力の賜物である、と言ったようなことを申したところ、後で、「五十嵐さん、シグマはボランティアが中心ですよ」、と注意されてしまった。この辺りの先生のお考えが如何に徹底しておられたかを改めて思い知らされた次第であった。

先生の物事に対する徹底ぶりはこの様なことだけではなく、論文の書き方には一層厳しいものがあつた。国際核データ委員会 (INDC) と欧米核データ委員会 (EANDC = NEANDC の全身) はその活動の1つとして標準データの評価を進めていたが、1968年頃から日本も2 MeV以下の炭素の全断面積評価を受け持つことになった。西村和明さんが中心で、更田豊治郎さんと田中茂也さんが協力者になり、私が計算を担当した。内容がまとまり、西村さんが報告書を書かれ、その原稿を先生がチェックされた。塚田甲子男さんや中嶋龍三さんも加わり、議論が沸騰した。特に、誤差の評価については厳しい注文が出され、西村さんは勿論のこと、更田さんも田中さんも辟易されていた。私にとっても、計算のやり直しの繰り返しで、いささか嫌気がさすほどであった。あの厳しさは容易に忘れられないものになった。この結果をJAERI 1218として発表したのが1971年10月だったから、先生が東北大に移られた後まで続いたことになる。

ここまでは先生の厳しさばかり強調した嫌いがあるが、大変温厚な優しい先生であった。特に、バラの花がお好きで、Van de Graaff研究棟の前に花壇を作られ、良く世話をされていた。また、意外と悪戯がお好きであったようで、当時は未だ珍しかった小さな録音機を使って電話の話を録音され、それを当人に聞かせては楽しんでおられた。私も一度、その悪戯に掛かったことがある。先生にしては珍しく、大した用事でもないことを電話されてきたので、変だとは思いつつながら応答していたら、ちょっと先生の部屋に来るようにとのことであった。先生の部屋に近づくと、誰やらと話をされている様子なので、覗いてみると先生だけで誰もいない。実は、私の声を再生して楽しんでおられたのである。「自分の声を聞くのって変な気分でしょう？」とにこにこされていた。

東北大に行かれてからはシグマ関係の会合にお顔を出されることが少なくなったが、大学の核データ研究を盛んにすることにご尽力されたことは東北大学の多くの優れた研究がそれを物語っている。これについては大学の方が触れられるであろう。

私が原研を定年退職してすぐの頃に先生の喜寿のお祝いをしたことがあった。そのとき、先生にお世話になった出席者の多くの方が、先生のご長寿を言祝ぎ、「次は米寿のお祝い」と思い、また話し合っていた。もう少しであのときの願いがかなえられると言うところであったのに、重ね重ね残念である。しかし、先生が残された核データへの想いと願いは今後とも多くの研究者、技術者に受け継がれていくものと思う。先生のご冥福をお祈りして筆を置きます。

百田先生を想う

岡本 浩一

原研の思い出

運転席の先生の態度が何かおかしい。「彼にはあいたくないな。・・・ああ駄目だ。彼がきた」。とたん、私どもの愛車「トヨペット・マスター」は、原研東海研のヴァンデグラフと研究 1 号炉（ウオターボイラー）脇の原研道路を外れて道路脇の芝生の上にあった。これは 1957、8 年ごろのトヨペット・マスターに百田先生とそばに乗ったわたしの光景である。当時は全然うるさくなかった原研構内での先生運転の一光景である。車の数も全然少なく、また公道での交通規制も全然ゆるやかだった良き時代であった。車のハンドルを握ると、日ごろの慎重な先生とはまったく別人の早口で滑らかな話し方に一変されるのは、大変な驚きであった。先生に代わって、私が運転しやっとなヴァンデグラフの建屋に戻ると、ダットサンを整備（私には分解としか思えなかったが）中の竹腰秀邦さん（通称おじサン）がニヤニヤと迎えてくれたのが、いまでも、昨日の事のように思える。先生は、「おじサン」にあうとほっとされるのは、いつものことであった。先生が免許を試験一回で取られてからは、何回となく東海—東京（まだ完全舗装でなかった、でこぼこの 6 号国道）をご一緒して道中、ドキットとする百田語のスピーチを聞かしていただいた。先生の自由が丘のお宅に近い我が家の地理的事情からご一緒したわけである。私も負けずに先生にはハッキリとかなり失礼なことを申し上げた記憶がある。その一つは「クリスタル・モノクロメータによる次ぎのレポートはまだ出来ませんか」とは私の運転中には聞かないで下さい、ということであった。安全運転中ということで、6 号国道上では議論は可哀そうに思われたのか、要求されなかったのが懐かしい。先生には公私にわたって本当に親身にお世話いただいた。車の運転の話しの続きだが、時がた

ち、1990年春ウィーンのIAEAから帰った途端に先生の伊豆のヴィラに連れて行って戴くことになり、小生の家の前に横づけになった大型のヴァンで乗りつけられた先生からウムを言わずキーをわたされ「どうぞー」。左ハンドルになれていた私には、本当に死ぬような思いで、伊豆に着いたが、ただニヤニヤ笑っている百田先生をあの時ほど恨めしいとおもったことはなかった。

東海研と百田先生

百田先生の東海研での生活は、それほど幸せであったとは言えないのではないかと。とくに後半は先生にとって苦い思い出のほうが多かった気がする。しかしほほえましい思い出も多い。ヴァンデグラフ建屋の入り口にバラを植えたのも懐かしい。使わなくなったら現状復帰するとの構内課との交渉も全てひとりでなざるほどの気の入れようであった。このバラの残骸は手入れをするひともいなくなった現在も老木化してのこっているが、そのことを報告すると、いつもうれしそうに笑われる百田先生であった。

先生と私は旧制麻布中学の先輩後輩の間柄である。時代こそちがえ、創立者江原素六のキリスト教精神にもとづいた自由な気風は、あの太平洋戦争の戦時下でものこっており、私どもも無意識のうちにも、その自由の精神を身につけていたと思う。だからどうも私には労働組合の集まりでの「団結！ エーオー！」というのが苦手であった。原研副主任研究員になるとすぐに組合脱退届けをだして、当時のわたしのグループのリーダーから、こっぴどく怒られたとき、どちらかと言うと進歩的な百田先生は麻布の精神に発する私の考えを理解してくださり慰めの言葉をいただき、また1970年からのフランスのサクレの核データセンターCCDNへの派遣の斡旋をしてくださった（もっともここが百田流なのだが、後からCCDNでの身分上の問題があるから、辞退したらとの忠告も戴いたが、・・・）。Saclay、Wienと職場をかえて、日本に帰ってきたときには百田先生も東北大学に転出され停年を迎えられていたが、この時も御自分が担当されていた日大文理の実験担当の講師の職を私に斡旋してくださった。私は現在もおかげでこの仕事をさせていただいている。

自由が丘のイーグルス喫茶店などでの長話

先生とは意識的にシグマ委員会の核データ活動についての話題は避けていたが、いささかご不満の点もあったようで、私がもうそろそろシグマ委員会の活動も辞めたいといったときには故中嶋龍三氏とともにきつく怒られてしまった。だがいまやこのお二人とも幽明境を異なってしまった。故中嶋龍三氏を先生は大変頼りにされ、何度となく中嶋さんを交えての会では、中嶋さんの家にちかいところの日本酒が飲めるところにしようと提案され、東横線のわたしどもの便も考えて、吉祥寺の店を選ぶことが多かった。

数少ないシグマ活動の話題では、先生が五十嵐信一氏を当時の日立中研の寺沢氏の所

から原研へやっと来てもらった時の苦労話等がおもいだされる。先生の五十嵐さんへの格段の配慮を感じたものである。

先生から「自由が丘の、百田です」の電話でお呼び頂いたときの、会うところは日曜日以外なら自由が丘の喫茶店イーグルスで私のウィーン好きを考えて、ウィーナーコーヒーをオーストリアの有名なアウガルテンのカップにいれたのを頼むのが定番であった。そうして先生と話し出すと最低 2 時間半、ときには 4 時間にもおよぶことが、ふつうであった。

前述したように核データに関する以外の話しは実に多岐多様で、亡くなられる直前の話題は「グレゴリアン聖歌と日本の声明くしょうみょうく」で、それでは実際に聞いてみようとなり、青山のスパイラルでの昨年 10 月 2 日（日）の天台声明「四箇法要」の切符をご自身で斡旋されおくって下さったのに、先生自身が直前の 9 月 25 日に逝去されてしまった。なんとも言えない気持ちである。

このイーグルス喫茶店にはお通夜の 9 月 27 日に田中姚子さんと家内の 3 人で出かけマスター特別の配慮で閉店時間をのばしてもらって先生をしのんだ。

年をとると意固地になるのは、私も人並みで先生との話はいつもごもっともとはいかないことも沢山あった。その一つが原発の問題で現在電力の 30%以上のシェアを原発がまかない、関電ではそれが 40%にもなっている事実、そうして代替の新エネルギーはまだ 2%そこそこであることは、認めるにしても原発の飛躍的推進には逡巡を感じるということの話しのとときに、先生が言われた CO₂ の削減のために原発が役立つという理由付けには私は真っ向から反対した。たしかに CO₂ の削減に寄与するのはわかるが、原発をスタートしたのはそんな理由でなく、あくまでも兵器としての利用から始まった原子力を何とか平和利用したいという悲願からであることが強調されるべきで、そうでなければ、やがて来るかもしれない自衛隊→軍隊→核装備のプロセスに対処できません、とゆずらなかつたが、しばらくたってから、私の考えももっともだといわれた。この間に、私は原子力平和利用の私の考えを何回か先生に説明したが、私自身の体験としてお話ししたのがつぎのことである。

1986 年 4 月 26 日のソ連チェルノブイリ原発事故のすぐ後 6 月 9 日からの、レニングラード（現在のサンクトペテルスブルグ）での IAEA の「中性子源の性質」を周囲の懸念を退けて開催したこと、この会で座長の Alain Bowen Smith の内々の理解はもらっていたが旧知の Nikolai Pavlovich Kocherov を説得し、彼も核物理研究者の誇りから正に悲壮な覚悟で「中性子源の性質」の会に相応しい事故報告をしてもらった。・・・但し公式の会の報告書には載せないという了解で・・・

この第一報がこの会に参加されていた住田健二氏によって日本へいち早く報告された。まだ旧ソ連下でのこのことは、今考えても冷やりとする。ただ私自身の経験に基づくこの話しを大分先生は感動して聞いて下さった。その後エネルギーの利用について、現在

話題にはなってきた燃料電池、コジェネレーションなどがイーグルす喫茶店での話題になった。その頃である。学習院大学では是非私に聞かせたい話があると誘われたのが、当時日亜化学工業にいた中村修二氏の「青色発光デバイスの進展—白熱電球を置き換える LED—」と題する仁科記念財団による 1998 年 12 月 12 日の講演であった。いまでこそ日本頭脳のアメリカ流出と騒がれている中村さんだがその時日本の正統派の学会発表では考えられないスタイルの彼の話かたと、内容に私はすっかり魅せられてしまった。お気に入りの平川直弘氏と喜多尾憲助氏をつれてしてやったりという顔つきで先生が私の後ろの席でニコニコされていた。

先生との話で面白いのは、私に挑発的にけんかを売られる時であって、この時はご機嫌のよいときである。といてそれを買わされるこっちにとってはたまらない。その一つは私の出身校の旧制東京高校出身者に対しての「ジュラルミン」というあだ名である。光って綺麗だが鉄のような重厚性には欠けるという意味での軽蔑の意味をこめた表現で正直いって当たっている点も多々あるのは事実である。ただ面と向って聞かされるとこっちも負けずに「成蹊高校は如何ですか」とやり返す。すると先生は「うーん。ひどいものもある」ということになる。因みに百田先生ご兄弟は旧成蹊高校出身である。この話の奥はかなり深いのだが……。

先生は亡くなられる少し前から、もとの嵯峨根研究室に関する事で大変悩んでおられた。この話は「墓場まで持って行かなくては駄目だろうか」と真剣に悩んでおられ私への電話口でもこぼしておられた。「保守党の政治屋ではあるまいし、そんなことはくだらないことで、科学史の立場にたって考えてください」と申し上げたら、その後電話で「吹っ切れました。やっぱりきちんと旧研究室の久武さんには申し上げた。有難う御座います」と申されてからは晴れ晴れとした様子になられた。

百田先生が本当に信頼されていた人は、竹腰秀邦氏であることは間違いない。1996 年に竹腰さんの紹介で関西の放射光装置を見学したあと、竹腰おじさんの案内で湧泉寺、石山寺などを訪ねたのはよほど嬉しかったらしく、そのあとでのイーグルス喫茶店での話は殆どがこの話題だった。故中嶋龍三氏との楽しい会食のあとで何回もここに竹腰さんが加わってくれたら…」としみじみと言われるのを中嶋さんともども聞かされ、なんとか広島へ連絡しなくてはと二人で相談したがそれも今では駄目になってしまった。

先生との話題は故 Alexander Langsdorf、理研のサイクロトロン再建、理研での思い出、有沢廣巳先生の話、その他山ほどあり忘れないようにメモを取り始めたが膨大な量である。また先生の言葉ではないが、あまり公表をはばかる事も沢山あって困ってしまう。またさらに、伊豆の狸、ミレニアムについて私にくってかかってこられたこと等など面白いお話も数えきれない。…自由が丘の…百田ですが…（これで 30 秒経過）の

の懐かしい電話を今でも待っています。

(2001/01/04)

仙台と百田先生

(東北大) 馬場 護

年が明けましたので一昨年のことになりますが、百田先生は3月、8月の二度にわたって仙台に足を運ばれました。百田先生にとって久しぶりのこの来仙は東北大学における研究室後継者である平川先生の退官行事のためでしたが、先生は元気そうにリュック姿で現れ東北大学時代の同僚や研究室卒業生などと懐かしそうに言葉を交わしておられたことを思い出します。先生は「前任者は定年行事には参加しないのが普通だそうですね」と言いながらもその機会を楽しみにしておられたようでしたが、我々研究室同窓生の多くにとっては先生にお会いする最後の機会となりました。その後、訪問して近況をお伝えしようと思いつつ、果たせないでいるうちに訃報に接することになってしまったことが心残りです。

百田先生は昭和44年東北大学原子核工学科（現量子エネルギー工学科）に赴任、53年まで原子炉物理学講座を主宰されました。平川助教授、三井助手に新参助手の私という陣容でした。炉物理の計算・実験と核データの実験を研究室の2本柱とし、核データの方は主に百田先生と私が担当するというのでスタートしました。しかし、講座の前任が理論屋であったため、実験関係の遺産といえは万力1個程度しかなく、まず実験器具を整備することから始める必要がありました。当時、百田先生はシグマ委員会関係の用務などでしばしば東海研に出張しており、その機会などを利用しては何かと物を調達する努力をしていただきました。私も先生と一緒に原研のバンデグラフやリニアックの実験室を訪れハード、ソフト両面で多大なお世話になりました。今でもそうですが、仙台—東海間の汽車は不便で、百田先生は東海との往来にはもっぱら愛車のスバルを利用していました。その車のNo.が369(みろく)でこれもお気に入りのようでしたが、それにしてもあの年での頻繁な仙台—東海の日帰り往復をものともしないタフさには感服しておりました。

当時、学科にはコッククロフト型中性子発生装置しかありませんでしたが、理学部原子核理学研究施設の300 MeV電子リニアックには120 m飛行管が整備されており、それを使って中性子全断面積測定の実験に取り組むことになり、C、 ^{238}U について実験を進めました。その内、「中速領域における ^{235}U の核分裂断面積測定」という百田先生の科学研究費(A)が当たり、中性子測定用の400リットルGd入液体シンチレータタンクを製

作し、測定系を整備することになりました。このシンチレータタンクの製作には、百田先生自ら設計図を引き業者と折衝するなど陣頭指揮で取り組みました。このシステムはタンク本体とリザーバ間のシンチレータの移動、不純物の除去や遮光などデリケートな取扱いを要しましたが、百田先生は全般にわたってマニュアルまで用意され、その注意深さには多くのことを教えられました。全断面測定では C、 ^{238}U について一応の結果を得ることができましたが、シンチレータタンクは体積が大きいために室内のガンマ線バックグラウンドやガンマフラッシュに敏感で、その対策にはずいぶん悩まされました。

その内、学科で進めていた静電型加速器の概算要求が認められ、我々もその建設に集中することになりました。機種を何にするかではずいぶん議論がありましたが、最終的にはシングルエンドのダイナミトロン加速器(4、5MV)を導入することになりました。ダイナミトロンは大電流が特徴で、引取試験では 3MV で陽子 3 mA を記録しましたが完成度の高いマシンとはいい難く、安定動作にはイオン源やパルサー周りを中心にいろいろの改良が必要でした。そのころ、ANL では一足先に同規模のダイナミトロンを導入して種々の改良を進めていました。百田先生は知己でもあった ANL の Dr. Langsdorf を学術振興会の交換研究者として招聘し、アドバイスを依頼しました。彼の東北大での滞在は 3 ヶ月でしたが、彼と ANL からの種々の情報は非常に有益で、実験室スタッフの努力とあって加速器も次第に安定になり、我々も同加速器を使った実験に取り組めるようになりました。

この時期までに建設開始から 3 年余が必要で、上述の液体シンチレータを再度試みたとき、Gd の濃度が低下しており予定した実験は難しいことが分かりました。という次第で、シンチレータ自体は目標を達成できずじまいになってしまいましたが、予算の半分近くを投入した測定器機はその後の実験に大いに有効性を発揮しました。そのころ、百田先生は核融合炉中性子工学に関する大学のまとめ役も努めており、ダイナミトロン実験室の TOF 用検出器コリメータや中性子遮蔽壁の整備を実現していただきました。これによって、ダイナミトロンのナノセックパルスを最大限に生かした TOF 法を用いて本格的な高速中性子核データの实验に取り組めるようになりました。

ダイナミトロンを使った実験が軌道に乗ってきたころ、百田先生は残念ながら定年退官を迎え、東北大学を去られました。百田先生は自ら先頭に立って旗を振ることはありませんでしたが、上述のように、重要な節目での百田先生の功績はきわめて大きく、我々の核データ活動の展開はその上にはじめて可能であったといえます。また、外国人研究者を仙台に呼ぶなど人的な交流の面でもお骨折りをいただきました。うわさに伝え聞いていた先生の「頑固さ」に直面した記憶は私には余りありませんが、仕事の方針を巡っての先生の信念は固く、かなり盛大な議論になったことは何度かありました。こちらの若気の至りによるところも少なくなかったのですが、先生はやんわりと自説を説きつつも最終的には我々の言い分をのんでくれたように思います。また、先生の注意深さ・慎

重さには正直言ってじれったさを感じたことが無かった訳ではありませんが、最終的にはわが身を省みることが殆どであったと思います。このようなことを重ねつつ、先生の定年退官後も、折に触れては研究室の同窓会などにもお付き合いをいただけてきました。

という次第で、百田先生が仙台に残された足跡には実に大きなものがあり、研究室で一緒したものとして感謝に耐えません。先生の生前のご厚情に感謝し、改めてご冥福をお祈りします。

百田さん

(データ工学) 喜多尾憲助

この夏(2000年)の暑さは格別だった。どういうわけかふと百田さんのことが気に懸かり、仁科記念財団に立ち寄ってご様子を尋ねてみようかと思った矢先の訃報であった。核データ研究会でお会いしたとき、「最近は何をなさっているのですか」という質問に「喜多尾さん、笑ってしまうでしょ。僕は週に一日、財団で名簿を作るためワープロを打っているのです」といわれたことがある。財団では仁科賞を受けた人の講演会を定期的に開く。二年程前になるが、その講演会の案内状を百田さんから頂いた。このようなことはついぞなかったことである。青色発光ダイオードで知られる中村修二さんが、そのときの講演者で、会場は学習院であった。百田さんとは核データ研究会の懇親会以来のことであった。会場では、東工大におられた久武和夫さんや、岡本浩一さん、平川直弘さんにもお会いした。帰途これらの方々と揃って目白から山手線に乗り、新宿でお見送りしたのが、百田さんとお話した最後の機会になってしまった。

私が初めて百田さん(昔、研究室の皆さんが「百田さん」と呼んでいた)にお会いしたのは、1953年(昭和28年)のことである。それから4年ほど東大理学部物理教室百田研究室で教室員として働かせてもらった。百田研は、嵯峨根遼吉教授の研究室からバンデグラーフ加速器と共に独立した核物理実験の研究室である。この装置は横型で、タンクの長さは8.2m、直径は2.6mと大きく、イオン源のある高電圧電極があり、タンクの一方の端からシバライトという絶縁物の水平円柱でそれを支え、加速管が突き出る端から2本のシバライト円柱で斜めに引っ張っていた。ベルトは絹にゴムを引いたものであったが、素材は戦時中バラシュートに使われたものだという。イオン源をコントロールするスライダックなどはタンクの外から琴紐を使って回し、電極内のメータはタンクの端に取り付けた自動車用ヘッドライトで照らし、細かい読み取りに双眼鏡が使われた。電圧を上げていくと、電極とタンクの間で放電がおこる。それをタンクの覗き穴から見ていて、タンク内の空

気を抜いて常圧に戻して中に入り、拭き掃除や放電の原因になりそうなゴミを拾うのである。設計最高加圧は 2.5MV ということであったが、私のいた頃は 1.2MV までしか電圧が上がらなかった。この装置は戦争中には X 線の発生装置に改造されたという。戦後この修復は百田さんの手で行われた。嵯峨根研にいた森永晴彦さんは「大変な中を、すべて手細工の泥まみれの努力がつけられた」（嵯峨根遼吉記念文集、1981）と書いている。ベルトに電荷を載せるコロナ櫛は蓄音機の針を利用して作られていたが、これも百田さんの手作りではなかったろうか。原子核の研究がわが国で再開したのは講和条約成立後であるから、私が入った頃は整備もやっと軌道に乗った頃であったろう。しかし百田さんから修復のための苦労話などは一度たりとも聞いたことはなかった。

初めてお会いしたとき、百田さんは理学部 1 号館 1 階のうす暗い廊下を端により、口にちょっと手をあてがって歩いてこられた。私はそのときの様子を思い出すたびに、そして遠慮がちな話し方や人への気配りを考え合わせると、その姿は百田さんの性格そのものを表しているように思うのである。しかし、自らの生き方は決して曲げないという強い意志もあったと思うことがある。1954 年 3 月のビキニ事件以後、放射線許容量という言葉が世間に広まり、私達の間でも議論になった。引き下げ説に科学的根拠なしとし、頑として同じ研究室にいた服部学さんの主張に賛成しなかった。このことで私は百田さんが保守的な考え方の持ち主と思ひこんでしまった。後日、原研労働組合が出した本「民主・自主・公開」(1972)によって、原研で起き国会でも取上げた大野事件で、百田さんは、研究者として大野善久氏擁護の立場を貫いたことを知り、自分の思い違いを大いに反省させられたものである。

「ある原子物理学者の生涯」という某氏の自伝には、百田さんと一緒に、理研のサイクロトロンを使って中性子散乱断面積の測定をやったという話がでてくる。もちろん百田さんが理研におられた戦前の話である。核データに関係するお仕事は、原研に移られてからのこととばかり思っていた私は、もう少し詳しくその頃のお話を聞こうと、この本のことを喋り出した途端、あれはウソばかりですと、珍しく強い口調で言われ、それ以上のお話は聞けなかった。学会などにお供したさい、泊まった宿の帳面には「教員」とだけ書かれるのを常とした百田さんには、この種の人物が性に合わなかったのかもしれない。真空系のフランジなどをボルトやナットで締め付けるとき、百田さんはしきりに「内力で」「内力で」と指示なされた。フランジにつながる配管に不要な力が及ばないようにとのことなのであるが、これも自分を抑え、万事に控え目な百田さんの「形」ではなかったかと、なんとなく今にして思うのである。

短い期間ではあったが、ずい分お世話になった。改めてお礼を申し上げたいことも、いろいろお聞きしてみたいこともまだあったのに、百田先生はそっと去ってしまわれた。

百田先生を偲んで

田中 姚子

自由ヶ丘駅からお宅にお通夜へ向かう初めての道すがら、‘先生はこの道を何十年も往き来しておられたのだ’と思ったとき、先生のご他界が不意に実感されました。

三十数年前、二人の娘の子育てで原研住宅に住んでいました私を竹腰女史が訪ねて下さり「百田先生を雑用から助けてほしい」と頼まれたのが先生との出会いでした。

委員会事務局の仕事は、私にとりましては初めての分野でしたから、五里霧中。先生や委員の方々のご指示とご助言を頼りに全力疾走の日々でした。核データという膨大な情報を大学・企業の枠を越えて共有しあい冗費を省き利便を図るのは日本ではまことに画期的なことだと素人ながら納得し、その縁の下の釘一本にでも、お役に立てることに意義を感じていたのです。

一身上の都合で東海村を去ることとなり、委員会の皆様方に多大なご迷惑をおかけしてしまいましたが、同時期に先生も東北大に移られたので、責任は何とか最小限果たせたと安堵したことでした。

ここ数年は中嶋龍三さん、岡本浩一さん（時に奥様も）とご一緒に、年一回程度、お食事を共にする機会を持たせて頂いておりましたので、中嶋さんとの立て続きのご訃報は大きな衝撃でした。

私も還暦を数年前に過ぎ、数え切れないほどの方の知己を得ましたが、先生は中でも紳士中の紳士であられました。数多の御友人、御知己の方を差し置いて、このような物言い自体、身の程知らずと重々存じていますが、特別な機会としてお赦し下さい。

先生は日本の男性には珍しく“少年の含羞”を生涯お持ちで、いつまでも若々しい好奇心と感性をお示しでした。青色ダイオードの中村さんのことを熱く語ってくださったのは数年前のことでした。普段は非常に穏かな方ですのに、清廉潔白でない人や、人の足を引っ張ったり、裏取引をする俗物には容赦なく非難なさることがあり、そんな先生の一面を拝見するのは新鮮な驚きで、改めて‘これぞ紳士’との思いを強くしたのです。

百歳までもお元気でいらして、折々に新しい情報をお教え頂けるものと信じていましたので、この突然のご訃報は残念でなりません。今は、遥か高い所から日本の原子力研究・開発の行く末を、しっかり見守って頂きたいと思うばかりです。